

〔研究ノート〕

# 倫理学とは何か〔1〕

—西洋倫理学と関連して—

浅井茂紀

## 目次

- I 序論
- II 本論
  - 第1節 倫理学とは何か —人間の行為の原理を研究する学—
  - 第2節 なぜ倫理学が必要か  
—人倫と理法の学における価値—
  - 第3節 ソクラテスの「汝自身を知れ」(gnôthi seauton.)  
—西洋倫理学の創始—
  - 第4節 プラトンの哲人政治と善のアイデア  
—四元徳とアイデア論—
  - 第5節 アリストテレスの倫理学(実践哲学)  
—観照(theôria)と中庸(mesotês)—
  - 第6節 イギリス経験論—経験(Experience)について—
  - 第7節 大陸合理論—理性(ratiô)について—
  - 第8節 ドイツ観念論  
—カントの善意志(guter Wille)について—
  - 第9節 キリスト教(Christianity)  
—愛(agapê)について—
- III 結論

## I 序 論

論者は、「倫理学とは何か [1] —西洋倫理学と関連して—」と題して考察してみる。その目次は前記の如しである。そして、「倫理学とは何か [1]」（以下、この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する）の項目や内容の記述や説明はもとよりのこと、且つ、カントの『純粋理性批判』での「私は何を爲すべきか」(Was soll ich tun?)<sup>(1)</sup>、という道德、倫理学的問題も重要であろう。また、宗教上のイエス・キリスト (Jesus Christ) の「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」(マタイによる福音書、5-44)<sup>(2)</sup>とあるキリスト教の根本的性格である愛 (agapê) の宗教、これらの認識や意識においても、この論文は、「倫理学とは何か [1]」と題して考察することも可能であると言えよう。

論者は、「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」<sup>(3)</sup>、「教育原理論—教育と学校の語源を中心として—」<sup>(4)</sup>「道德教育の研究について—道德と教育の語源を中心

---

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A.805, B.833., S.728.

カントは、この『純粋理性批判』で、

- ①私は何を知ることができるか。(Was kann ich wissen?) を思弁的 (spekulativ), 哲学的問題としている。
- ②私は何を爲すべきか。(Was soll ich tun?) を道德的 (moralisch), 倫理学的問題としている。
- ③私は何を希望することが許されるか。(Was darf ich hoffen?) を実践, 理論的 (praktisch und theoretisch), 宗教学的問題としている。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書, *The New Testament*』(英和対照) 日本聖書刊行会, 昭和52年, 12ページ。

“But I say to you, love your enemies, and pray for those who persecute you; (Matthew, 5-44)

(3) 拙稿「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」(論説)『千葉商大紀要』第38巻第2・第3合併号, 千葉商科大学国府台学会, 2000 (平成12) 年12月31日, 57-74ページ。

(4) 拙稿「教育原理論—教育と学校の語源を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第39巻第1・第2合併号, 千葉商科大学国府台学会, 2001 (平成13) 年9月30日, 1-23ページ。

として—」<sup>(5)</sup>，などでも，すでに哲学，孟子の哲学，教育などについて多少なりともリサーチ (researches) をなしてきた。そこで，論者は，本論において，

(1) 倫理学とは何か，として，倫理学 (Ethics) の語源や漢字の意義を説明する。倫理学の訳語は，井上哲次郎であることの根拠を挙げてみる。倫理学の概念にも触れ，倫理学の定義は「人間の行為の原理を研究する学」ではなかろうか，ということの問題にする。

(2) なぜ倫理学が必要か，として，人倫と理法の学における価値でもあるが，人間，人倫，理法，幸福，行為などの必要性が挙げられよう。

(3) ソクラテスの「汝自身を知れ」において，ソクラテスは，人間の本質的なものを問題にした。「汝自身を知れ」や「無知の知」，「知徳福の一致」や「知行合一」などの事柄において，ソクラテスは，西洋倫理学の創始者ではなかろうかと，論者は思考する。

(4) プラトンの哲人政治と善のアイデアにおいて，プラトンは，哲人が善のアイデアを認識し，善き国家建設を掲げた。それには，四元徳やアイデア論が根底にあったと言えよう。

(5) アリストテレスの倫理学 (実践哲学) において，アリストテレスの最高善，幸福を問題にしたい。理性には，知的徳のテオーリアと道徳的徳のメソテースが存在する。

(6) イギリス経験論において，イギリス経験論者達は「経験」に価値を置いたが，経験の概念，意義が多様であることを問題にする。この経験は倫理学上重要であろう。

(7) 大陸合理論において，大陸合理論者達は，理性の存在を前提にして，各々哲学者なりに「理性」に価値を置いたことを問題にする。この理性も倫理学上重要と言える。

(8) ドイツ観念論において，カントの善意志 (guter Wille) とは何かを問題にする。

---

(5) 拙稿「道德教育の研究について—道德と教育の語源を中心として—」(研究ノート) 『千葉商大紀要』第39巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2001(平成13)年12月31日，187-205ページ。

(9) キリスト教において、仏教は慈悲が大事であるが、キリスト教は「愛」の宗教である。愛も倫理学上の重要な概念の一つである。その愛とは何かを問題にしてみる。

かくして、これら「倫理学とは何か [1]」の中身を記述し、そのシステムティックな体系化 (systematization) をして、その意義を考慮してみたい。

次に、Ⅱ 本論 第1節 倫理学とは何か、ということから論者は考察する。

## Ⅱ 本 論

### 第1節 倫理学とは何か—人間の行為の原理を研究する学—

倫理学とは何か、思考してみよう。

倫理学は、英語でEthics, ドイツ語でEthik, 仏語でéthique, と言う。これらの語源は、ギリシャ語のエートス (êthos) やエトス (ethos) に由来する。どちらも「風俗習慣」という意味である。倫理学は、道徳哲学 (moral philosophy) と同義的だが、この英語のモラルは、ラテン語のモレス (mores) に由来して、これも「習慣」という意義である。さらに、倫理学の3文字は、『哲学字彙』(井上哲次郎識, 明治14年4月)<sup>(6)</sup>に記載されている。その辞書の中に、Ethicsが「倫理学」と訳されている<sup>(7)</sup>。この倫理の熟語は、「凡そ音は人心に生ずる者なり。楽は倫理に通ずる者なり」(『礼記』楽記第19) や、「倫理を正し、恩義を篤くす」(『近思録』) に由来する。

ところで、井上哲次郎自身が、この『哲学字彙』の草稿を西周 (にしあまね) に送って、その意見を問うたこともある<sup>(8)</sup>。

(6) 井上哲次郎識『哲学字彙』, 東大三学部印行, 明治14年4月。

これは、主として英語だが、多少ドイツ語, フランス語も, ミックスされたコンパクトな辞書である。左ページのE欄に, Ethicsとあり, 右ページに倫理学と訳されている。

(7) 拙著『学と真理—フィロゾフィー・エーティック・リテラトゥーア・エアツイーウング論集—』[共著], 高文堂出版社, 1991 (平成3) 年4月15日, 倫理学の概念(2), 18ページ。

(8) 大久保利謙編『西周全集第1巻』宗高書房, 昭和45年, 31ページ。

西周も、Ethicsという英単語も使っており<sup>(9)</sup>、この「エシックス」(Ethics)を「エチック」とルビを付けて、「彝倫学」(いりんがく)と訳している<sup>(10)</sup>。

すなわち、「彝倫学」の訳語は、西周(1829-1897;文政12-明治30年)による。また、「倫理学」の訳語は、井上哲次郎(1855-1944;安政2-昭和19年)である。その根拠は、井上哲次郎自身が、「倫理学」は自分の訳語である<sup>(11)</sup>、と記述しているのである。

次に、倫理学の漢字についていえば、

①倫は、ともがら(輩)、なかま、すじみち(筋道)、のり(紀、法)などの意義である。

②理は、おさめる、みがく、すじみち(筋道)、ことわり(理)などの意味である。

従って、倫理とは、もののすじみちであり、人倫、人道である。いわば、人間の行為の原理といえる。今日、倫理学とは何か、というような倫理学の概念(Concept; Begriff)は、多種多様であろうが、ソクラテスの知徳福の一致、プラトンの四元徳(知恵・勇気・節制・正義)、アリストテレスのテオーリア(theôria) = 観照やメソテース(mesotês) = 中庸、キリスト教の三元徳(信仰・希望・愛)、カントの定言的命命(kategorischer Imperativ)であるところの当為(Sollen)、仏陀の慈悲や中道倫理、さらに、孔子の「学びて思はざれば則ちくらし。思いて学ばざれば則ちあやうし。」(『論語』為政第2)<sup>(12)</sup>や、孟子の「誠は、天の道なり。誠を思うは、人の道なり。」(『孟子』離婁上)<sup>(13)</sup>などには注目できよう。

ゆえに、倫理学とは何か—人間の行為の原理を研究する学—では、倫理学の概念は多様であるが、倫理学の定義は「人間の行為の原理を研究する学」<sup>(14)</sup>と、論者は考えるのである。そして、この行為(Conduct)は、能動的で活動的な行為として

(9) 注(8)参照。大久保利謙編、前掲書、206ページ。

(10) 注(8)参照。大久保利謙編、前掲書、163ページ。

(11) 拙著『人間の理念と政治哲学—哲学、倫理学、教育原理、道徳教育の研究、政治思想史等論集—』[共著]、高文堂出版社、1995(平成7)年4月5日、15ページ。「倫理学」などの訳語に関して、井上哲次郎の「学界回顧録」(「中外日報」)記事がある。

(12) 子曰、學而不思則罔。思而不學則殆。(『論語』為政2)。

(13) 是故誠者、天之道也。思誠者、人之道也。(『孟子』離婁上)。

(14) 拙著『倫理学要論(1)—孟子とソクラテス—』[改訂版]、高文堂出版社、1986(昭和61)年4月14日、154ページ。

のアクション (Action) であり、手が必要なため身体的運動としてのハンドリング (Handlung), これらを止揚して (aufheben), 総合された身体的, 精神的な行為 (Conduct) に分類できるのである。

## 第2節 なぜ倫理学が必要か—人倫と理法の学における価値—

なぜ倫理学が必要か, 思考してみよう。特に, 大学の教育において, 私達は, なぜ倫理学が必要かと言えば, 先ず, 教育の目的であるが, 「教育は, 人格の完成をめざし, 平和的な国家及び社会の形成者として, 真理と正義を愛し, 個人の価値をたつとび, 勤労と責任を重んじ, 自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」[「教育基本法」, 第1条 (教育の目的)]<sup>(15)</sup>なども配慮されよう。教育のあり方として, なぜ倫理学が必要か, という問題や検討であるが, 主に, 次の5つの項目と事柄が大学生達の人格形成におけるその倫理学の必要性と言えよう。このことは大学生達に限らず, 一般の人々にも当てはまることであろう。つまり, (1)人間, (2)人倫, (3)理法, (4)幸福, (5)行為の大略5つの必要性を挙げてみる。

(1)人間…倫理学は, 人間の学である。人間いかに生きるべきかである。道具やハイテクを使う人間は自然の動物や鳥類などと基本的な相違があろう。一人だけで国家や社会の生存は困難で, 複雑な人間関係の中で主体的に生きていかなければならない。それには人間としてのルールや規範, 行為の原理などが必要となる。それが倫理学の必要性である。

(2)人倫…人倫とは, 孟子の言葉である。孟子は「契をして司徒たらしめ, 教えるに人倫を以てす。父子親有り, 君臣義有り, 夫婦別有り, 長幼序有り, 朋友信有り。」

(『孟子』滕 [とう] 文公上)<sup>(16)</sup>, と述べた。人倫とは, 親義別序信の五倫である。

(15) 永井憲一他編『三省堂新六法』, 三省堂, 1990年, 「教育基本法」第1条 (教育の目的), 191ページ。なお, 原文では, 「個人の価値をたつとび」とあるのを, 筆者が, 「個人の価値をたつとび」と現代文に直した。

(16) 使契爲司徒, 教以人倫。父子有親。君臣有義。夫婦有別。長幼有序。朋友有信。(『孟子』滕文公上), (傍点筆者)。拙稿「孟子の人倫哲学論—五倫について—」(論説)『千葉商大紀要』第32巻第3号, 千葉商科大学国府台学会, 1994 (平成6)年12月30日, 1-19ページ。

人と人との秩序関係、孔子の言う人道である。又、孟子が「聖人は、人倫の至りなり。」(離婁上)<sup>(17)</sup>、とも言っている位、モラル (morals) としての人倫は人格形成上重要な人間の理念である。

(3)理法…倫理学の倫とは、仲間、筋道の意味であり、理とは、筋道、ことわりの意味である。従って、理法とは、筋道、道理であり、規則や法則でもある。法則は当為の法則(規範)と必然の法則(事象)がある。理法は規範的で実質的なロゴス(logos)<sup>(18)</sup>、正しい道理である。すなわち、倫理学は、人倫と理法の学<sup>(19)</sup>とも言えるのである。

(4)幸福…倫理学の目標は、幸福の追求にある。人々のいかなる専門や職業も幸福の獲得にあろう。プラトンは、善のアイデアを強調したが、アリストテレスは、各々の職業的専門領域の目的が善であるとして、最高の目的が最高善であり、それが幸福であるとした。現実の各自の専門などが相違しても、愛だけでなく幸福それ自体は普遍的理念である。

(5)行為…倫理学は、人間の自由、正や不正、善や悪、「人間の行為の原理を研究する学」である。

行為 (conduct) は、人間の全 (V) 動作でもあるが、明白な目的観念や動機があり、決心し意識的に実行される意志的動作であり、善悪的判断の対象と成りえる理由で以て、行為の実行は重要である。従って、法律だけでなく倫理学上人間の行為 (conduct) と他の動物などの行動や習性 (behavior) とは相違するので倫理学の必要性があると<sup>(20)</sup>、思う者である。

ゆえに、なぜ倫理学が必要か—人倫と理法の学における価値—では、上記の如く、主に、(1)人間、(2)人倫、(3)理法、(4)幸福、(5)行為、これらの5つの必要性と価値が

---

(17) 孟子曰、規矩方員之至也。聖人人倫之至也。『孟子』離婁上。

(18) ヘラクレイトスの哲学におけるロゴス (logos) については、拙稿「ギリシャ古代の自然哲学について—自然哲学と問題—」(研究ノート)『千葉商大紀要』第34巻第4号、千葉商科大学国府台学会、1997(平成9)年3月30日、91ページ。また、拙稿「ヘラクレイトスの哲学における若干の問題—万物は流転する説、火とロゴスに関連して—」、『学と文芸』65集、学と文芸会、平成7年7月30日、48ページ、等。

(19) 注(1)参照。拙著、前掲書(『人間の理念と政治哲学』)[共著]、14ページ。

(20) 注(1)参照。拙著、前掲書[共著]、13-14ページ。

あると、論者は考えるのである。

### 第3節 ソクラテスの「汝自身を知れ」(gnôthi seauton.) —西洋倫理学の創始—

ソクラテス (Sôkratês; Socrates, 470/469-399B. C.) は、ギリシャ古代、アテナイの哲学者。父は彫刻家、母は産婆であった。愛知者・ソクラテスの哲学、教育哲学<sup>(21)</sup>、道徳哲学や倫理学などの意義を説明すると、

(1) ギリシャ古代の自然哲学者達 (哲学の開祖・タレスから原子論者・デモクリトスまで) が、自然のアルケー (archê), 自然の原理を問題にし、(2) ソフィスト達 (知者・プロタゴラスからクリティアスまで) が、人間を問題にしたのに対して<sup>(22)</sup>、(3) ソクラテス (愛知者) は、人間の原理を問題にした<sup>(23)</sup>、と言えよう。

それでは、その人間の原理とは何か、というと、まず、ソクラテスのモットー、

①汝自身を知れ (gnôthi seauton.) が考えられる。この出典は、クセノフォーン (Xenophôn) のメモラビリア (*Memorabilia*) である。ソクラテスとエウテュデーモスとの問答で、この「汝自身を知れ」の言葉が記載されている<sup>(24)</sup>。ソクラテスは、彼に、自分の名前だけを知っている人間が、自己を知っていることにはならないとして、馬を買う人々ならば、馬の用途上、すべて調査するまでは馬を知ったと思わないように、自己についても、人間の用途上、自己の力量を知っている人間が、自己を知る者で見なしている。しかし、その自己の力量という解釈は、不十分である。この「汝自身を知れ」、すなわち、あなた自身を知れ、ということは、逆に、

---

(21) 拙著『教育哲学要論—教育原理、道徳教育の研究、哲学等—』、高文堂出版社、2002 (平成14)年4月1日、ソクラテス (Sôkratês) の教育哲学—産婆術 (maieutikê) —、141ページ。

(22) 注(1)参照。拙著、前掲書、[共著]、65ページ。

(23) 注(1)参照。拙著、前掲書、[共著]、67ページ。

(24) 拙著、『哲学の原理』【改訂版】、高文堂出版社、1987 (昭和62)年7月7日、52-56ページ。クセノフォーン『ソクラテスの思い出』(佐々木理訳)、岩波書店、昭和43年3月20日、199-200ページ。なお、エウテュデーモスは、後に、ソクラテスの弟子になった。もっとも、元来、この「汝自身を知れ」という言葉は、最初、デルフォイのアポロン神殿の玄関の柱に刻まれていたといわれる。一説には、哲学の開祖・タレスがそれを奉納したともされる。21世紀の現今では、「自他を知る」ことも肝要であろう。



受け取った側としては「自分自身を知る」、つまり、自己自身の全認識であると、論者は考えるのである。自己は、自己について他人よりも知っている事もあるが、自己の真実の全認識は難解であろう。ここに、ソクラテスの哲学である「汝自身を知れ」の意義があると思われる。この「汝自身を知れ」を含めて、他に、②無知の知 (wisdom of ignorance) = 自ら知らないことを知っているとは思っていない [Platôn: *Apologia Sokratous*] <sup>(25)</sup>。無知の自覚と認識である。③産婆術 (maieutikê) = 相手に教えるのではなくて、相手が自分で真理 (alêtheia) を生み出すことを助けるにすぎないもの。問答法に同じ。母の産婆の仕事に譬えた。④よく生きる = 単に生きることではなくて、善く生きる。悪ではなくて善に生きることである。⑤知徳福の一致。知恵と徳と幸福は一致する。徳 (aretê) とは何かと言うと、現実の具体的な徳の実例ではなくて徳の普遍概念である。ソクラテスは普遍的真理の確立を目指した。⑥真善美の一致。目的に完全に一致するものは美にして善であり、真理の具現である。⑦魂 (psychê) の配慮。彼は、魂とは自己の内に入り、魂の世話をして善くするように人々に対話することを使命とした。魂は、真理と徳を認識する。ソクラテスは、魂の探究なき生活は生きがいのない生活である、と言う。さらに、⑧知行合一。知恵と行為とは一致する。これら倫理学上、重要な事柄などである。

ゆえに、このような愛知者・ソクラテスの①～⑧などが人間の原理として挙げられる。なぜかと言うと、これらは人間の本質的なものであるからである。これらが、ソクラテスの哲学、教育哲学、道徳哲学や倫理学などについての中身、内容である。また、これら「汝自身を知れ」、「無知の知」や「産婆術」、「知徳福の一致」や「知行合一」などの事柄において、ソクラテスが、西洋倫理学の創始者であると、論者は考えるのである。

#### 第4節 プラトンの哲人政治と善のイデア—四元徳とイデア論—

プラトン (Platôn; Plato, 427-347B. C.) は、アテナイの名門の出身 (父はアテ

(25) プラトン『ソクラテスの弁明・クリトン』(久保勉訳)、岩波書店、昭和41年、21ページ。

ナイの王の子孫)。ソクラテスの弟子 (プラトン20歳頃～28歳まで師事)。前399年、師の刑死後メガラからシケリアに遍歴。前387年 (40歳)、アテナイにアカデメイア創立。その後二回シケリアに行くがディオニシオス二世に失望する。前347年 (80歳)、永眠。著『国家』、『饗宴』、『テアイテトス』など対話篇。

プラトンの哲学と倫理学は、**哲人政治と善のアイデア**、**四元徳** (知恵, 勇気, 節制, 正義) と**アイデア論**である。ソクラテスの関心は、ソフィスト達とは相違し、ポリスの市民としての道徳的善き生き方であり、それは人間の原理でもあった。ソクラテスの弟子プラトンは、師の死刑により、倫理的に正しい善き国家の実現を理念とした、理想主義者である<sup>(26)</sup>。

プラトンにおいて、**魂** (psychê; Soul) は三つの部分に分類される。

第一は知識をめざす**理性** (logistikon; reason) 的部分の**知恵** (sophia; wisdom)、第二は名誉をめざす**気概** (thymoeides; spirit) 的部分の**勇気** (andreia; courage)、第三は快楽をめざす**欲望** (epithymêtikon; desire) 的部分の**節制** (sophrosynê; temperance) である。第一の部分が知恵の徳を備え、他の二つの部分がこれに服従して、各々勇気と節制の徳を備える時、魂は全体として**正義** (dikaiosynê; justice) の徳を備えて正しいと言われる。人間の性格も魂のこれら三つの部分のどれが優勢であるかによって相違してくる。

**国家**も三つの階級に分けられる。

第一は知識によって指導する**支配者階級**、つまり、**哲人=哲学者**。第二は名誉を重んじる**防衛者階級**、つまり、**軍人**。第三は生活用品を提供する**生産者階級**である。つまり、**農商工職人**。これら三つの階級が、各々の職分を守って、知恵, 勇気, 節制の徳が調和 (harmony) する時、国家は全体として、倫理的正義の善き国家になるというのである。その際、重要な事は、この哲人=哲学者は、「**善のアイデア**」<sup>(27)</sup>、すなわち、**善自体**を認識する必要がある。善のアイデアが最高のアイデアである。勇気や節制, 正義も善のもとに包括されるからである。プラトンは、善のイデ

(26) 拙著『哲学要論—哲学, 中国哲学, 倫理学—』, 高文堂出版社, 2002 (平成14) 年4月1日, 第4節プラトン, 41ページ。

(27) プラトン『国家』478, (山本光雄訳), 河出書房, 昭和42年, 216ページ。斉藤忍随『プラトン』岩波書店, 1987年, 137ページ。

アを太陽に譬えている。生きとし生けるもの太陽なくしては生きられない。人間は太陽の光の認識はできるが、あの太陽それ自体の解明と認識は困難であろう。従って、その哲人政治のためにもプラトンのイデア論は展開されて、イデア (idea) というものが解明される必要があったと考える者である<sup>(28)</sup>。

さらに、美とは何か、という場合も美のイデアと答えられる。美とは、この世の現象界の美しき事物のことではない。なぜならば、主観や感覚的で不完全なものであるからである（但、その事物に美のイデアは、多少分有している）。その美しき事物とは相違するイデア界の美の本質、美自体、美の原型でなければならない。これが美のイデアである。つまり、イデア (idea) とは、本質、そのもの、それ自体、原型、真実在、本体などの意義である。

ゆえに、プラトンの哲人政治と善のイデア—四元徳とイデア論—では、プラトンは、哲人、すなわち、哲学者が、善のイデアを認識して、哲学者が政治家となるか、さもなければ政治家が哲学すべきであると主張した。それが、善き国家であり、国民の理想的な美にして善の倫理的な行為のあり方であると、論者は考えるのである。

## 第5節 アリストテレスの倫理学（実践哲学）

### —観照 (theôria) と中庸 (mesotês) —

アリストテレス (Aristotelês; Aristotle, 384-322B. C.) は、プラトンのアカデメイア (Akademeia) で、20年間研究（前367-前347年）した。アレキサンダーの家庭教師（前343年頃）、リュケイオン (Lykeion) を創設（前335年）、現実主義者であり、万学の父と言われる。

アリストテレスの善とは何か。いかなる技術、研究、実践、選択もなんらかの善 (agathon = アガトン) を求めている<sup>(29)</sup>。善とはすべての者が求めるものである。例えば、医療では健康、統帥では勝利、建築では家屋など各々の領域の目的が善で

(28) 注(11)参照。拙著、前掲書、[共著]、71ページ。

(29) アリストテレス『ニコマコス倫理学』（高田三郎訳）、河出書房新社、昭和41年、17ページ。

ある。人はすべての目的が必ずしも究極的な目的ではない。従って、究極的な目的は最高善である。最高善は手段ではなく目的それ自体のものである。また、自己、親子、妻、親友、国民全体が充分認める善きものである。最高善＝最高の目的は何であるか。アリストテレスは、最高善は「幸福」(eudaimonia; happiness)であると言う。

人間は、本来的に**理性**(nûs; reason)をもっている。さらに、理性がもっているのは知的徳(intellectual virtues)である。また、理性に従って行為するのは道徳的徳(moral virtues)である。この理性が働くところに幸福がある。

人間は、**徳**(aretê), すなわち、知的徳(知性的な卓越性)や道徳的徳(倫理的な卓越性)をもつことが幸福である。人間の最大の幸福は、**知的徳のテオーリア**(theôria = 観照, 観想)の生涯である。つまり、理性的活動である。**愛知**＝哲学(philosophia)としての真理探求の生活である。これを彼は「神的幸福」と言う。

人間の道徳的活動でも幸福が得られる。徳は倫理や道徳的行為を繰り返すことによって生じる。従って、徳とは善行の習慣である。自然の石は幾度投げ上げても上昇するが慣らすことはできない。人間の徳は「習慣」(êthos; custom)により形成される。理性は過不足の中間を目指すので**道徳的徳はメソテース**(mesotês = 中庸)を得る事が肝要である。人間の行為において両極の過不足は悪徳で、中間の中庸が善い。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』<sup>(30)</sup>では、恐怖と平然に関しては、**勇敢がその中庸**である。ex.

①恐怖—**勇敢**—平然。②快樂—**節制**—苦痛。③放漫—**気前**—吝嗇。④派手—**豪華**—地味。⑤傲慢—**矜持**—卑屈。⑥短気—**温和**—無神経。⑦虚飾—**真実**—卑下。⑧道化—**機知**—野暮。⑨機嫌取り—**親愛**—不愉快者。⑩内気—**羞恥**—恥知らず。⑪嫉妬—**義憤**—悪意。⑫**正義**…広義の正義＝**究極的徳**, すべて(√)の道徳的徳。狭義の正義＝分配的正義と是正的正義。(a)**分配的正義**＝名誉とか財産などを人々に公平に分配する。(b)**是正的正義**＝不正や害悪に対して利害を是正し平均化する。つまり、損害賠償をさせる。道徳や倫理、法律や経済的に加害者の利益と被害者の損失を均等化するの**が是正的正義であり中庸である**<sup>(31)</sup>。

(30) 注(29)参照。アリストテレス, 前掲書, 47-49ページ。

(31) 注(11)参照。拙著, 前掲書, [共著], 76ページ。

ゆえに、アリストテレスの倫理学（実践哲学）—観照 (theôria) と中庸 (mesotês) —では、人の目的が善であり、究極的な目的が最高善である。最高善は幸福である。人間は理性がある。理性には知的徳のテオーリア（観照）と道徳的のメソテース（中庸）が関わっている。それらは善であり、幸福の獲得が配慮されていると、論者は考えるのである。

## 第6節 イギリス経験論—経験 (Experience) について—

大陸合理論と対照的なイギリス経験論 (British empiricism)<sup>(32)</sup>について概要を記してみる。特に、イギリス経験論の代表的な5人の哲学・倫理思想を略述する。

(1) ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) は、「知は力なり」(Knowledge is power.) を主張したイギリス経験論の祖である。ベーコンのいう**経験** (experience) は、**観察** (observation) と**実験** (experiment) であった。三段論法や演繹法を否定して、**帰納法** (induction) を提唱した。他方では、**種族** (idola tribus), **洞窟** (idola specus), **市場** (idola fori), **劇場** (idola theatri) の4つの**イドラ** (idola; Idols), すなわち、偶像を除去して、新しい学問の方法を考案したのである。([ノヴム・オルガヌム] = *Novum Organum*)。

(2) ホッブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) は、「万人の万人に対する戦争」や「人は人に対して敵」の概念で**国家契約説**を主張した。すべての思考の根源は、**感覚**であり、**感覚**とは外的物体が感覚器官に働きかけることにより生じる。

物体によって刺激された感覚器官の作用は、**記憶**となる。ホッブズは、この**記憶** (memory) を**経験**とした。倫理的には、人体内の運動の端緒を**努力**と呼び、**欲求は善**、**憎悪は悪**としたのである。([リヴァイアサン] = *Leviathan*)。

(3) ロック (John Locke, 1632-1704) は、大陸合理論者・デカルトの**生得観念** (idea innata) を否定し、人間の心 (the Mind) は「**白紙**」(white Paper; tabula rasa) と認識した。倫理的には、孟子の**性善説**や荀子の**性悪説**とも相違する。いわば、告子の**性不善無不善説**を想起する。ロックは、この**白紙の心**に**感覚** (sensation)

(32) 拙著『人倫と愛知』[共著]、高文堂出版社、1993(平成5)年5月10日、後編I章、学術論文、イギリス経験論とカントの哲学、173-201ページ。

と反省 (reflection) の内包した経験から種々の観念ができるとした。『人間知性論』 = *An Essay concerning Human Understanding* <sup>(33)</sup>。

(4) バークリー (George Berkeley, 1685-1753) の言う経験は、「存在することは知覚されることである」 (esse est percipi.) ことから理解できるように知覚 (perceptions) である。さらに、その知覚は、観念 (ideas) と精神 (spirit) に分類したのである。『人知原理論』 = *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*。

(5) ヒューム (David Hume, 1711-1776) の言う経験は、知覚 (perceptions) である。さらに、この知覚は、印象 (impressions) と観念 (ideas) に分類されたと言えよう。さらに、倫理、道徳論としては、「共感」 (sympathy) を説いた。ヒュームは、生得観念や因果関係を否定して、人間は「知覚の束」にすぎないと見なした。ヒュームの懐疑論により、後に、カントが「独断のまどろみを破らされる」結果となるのである。『人性論』 = *A Treatise of Human Nature*。

ゆえに、ベーコン、ホブズ、ロック、バークリー、ヒュームの5人のイギリス経験論者達は、「経験」 (Experience) を重視した。倫理学上「経験」は重要な概念である。しかし、経験といっても、各自の経験の概念や内容は、上記の如く多様で必ずしも同一ではないと、論者は考えるのである。

## 第7節 大陸合理論—理性 (ratiô) について—

イギリス経験論と対照的な大陸合理論 (Continental Rationalism) <sup>(34)</sup> について概要を記してみよう。主に、大陸合理論の代表的なデカルト、パスカル、スピノザ、ライプニッツの4人の哲学・倫理思想を論述する。大陸合理論者達は、理性 (ratiô; raison; Vernunft) を重視したと言えよう。

(1) デカルト (Descartes, 1596-1650) は、すべてのものを疑い尽くして、もう

---

(33) John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, Clarendon Press, Oxford, 1975, p 104.

(34) 拙稿「大陸合理論とカントの哲学—理性の重視—」(論説)『千葉商大紀要』第36巻第4号, 千葉商科大学国府台学会, 1999 (平成11)年3月30日, 43-61ページ。

それ以上疑うことのできない真理 (veritas) を得ようという「方法的懷疑」からスタートして、「われ思う、故にわれ在り」(Cogito, ergo sum.; Je pense, donc je suis.; I think, therefore I am.) を明晰判明に獲得した。(『方法序説』 = *Discours de la méthode*)。疑うことは、思考することであり、理性 (ratió) に基づくのである。デカルトの**実体** (substantia) とは、「その存在のために他のものを必要としないで存在するもの」として、「神の存在証明」を為す。無限実体は**神** (Deus) とし、有限実体は**物体** (corpus) と**精神** (mens), その**属性** (attribútum) は**延長** (extensio) と**思考** (cogitatio) として、**物心二元論**を主張する。又、生得観念 (生得原理) を肯定した。後、ロックは、デカルトの生得観念を否定し、人間の心 (the Mind) は白紙 (white Paper; tabula rasa) と見なすのである。

(2) パスカル (Pascal, 1623-1662) は、人間は「考える葦」(roseau pensant; a thinking reed) である、と言う。(『パンセ』 = *Pensées*)。よく考えて努力することが倫理・道徳の原理とした。人間の弱さや惨めさと考える偉大さを認め、合理的思考の「幾何学的精神」や直観する「繊細的精神」の上に「心情」があり、キリスト教の**神** (God) の**愛** (agapê) による救済を信じたのである。

(3) スピノザ (Spinoza, 1632-1677) は、汎神論者であり、一元論者である。スピノザの**実体** (substantia) とは、「それ自身のうちに在り且つそれ自身によって考えられるもの」と定義している。(『エチカ』 = *Ethica*)<sup>(35)</sup>。**実体**は「**神即自然**」でもある。その**属性** (attribútum), 即ち、実体の本質や**様態** (modus), 即ち、実体の変状も定義し、実体の属性として**思惟**と**延長**を主張した。スピノザは、物を「**永遠の相の下に**」知覚することが「**理性**」の本性に属するとして、**理性** (ratió) を重視した大陸合理論者である。

(4) ライプニッツ (Leibniz, 1646-1716) は、多元論者である。**单子** (Monade; monad) を主張した。(『单子論』 = *Monadologie*)。モナド (Monade; monad) は、単一 (monas) というギリシャ語に由来する。ライプニッツは、**実体は单子** (モナド) とした。宇宙は無数の单子から構成され、各々の単子は質的に相違して、**単子には窓がない**。宇宙の鏡でもある。量的なアトムは拡がりをもつが、モナドは分割

---

(35) スピノザ『エチカ—倫理学—』上、(畠中尚志訳)、岩波書店、昭和41年、35ページ。

できない点、表象力である。生動的で靈的、**生命や力**である。靈魂単子は、理性や精神を内包する。最高の単子は神であり、「**予定調和**」がある。宇宙はモナドの集合、合成体であると見なすのである。

ゆえに、**大陸合理論—理性 (ratiô)** について—では、それら4人のヨーロッパ大陸合理論達は、このように「**理性**」(ratiô; raison; reason; Vernunft) を重視して価値を置いたと、論者は思考するのである。

## 第8節 ドイツ観念論—カントの善意志 (guter Wille) について—

カント (Immanuel Kant, 1724-1804) は、その著『**道徳形而上学原論**』(*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*)、第1章、道徳に関する普通の理性認識から哲学的な理性認識への移行行き、冒頭で、**善意志 (guter Wille)** に触れている。

「我々の住む世界においてはもとより、およそこの世界のそとでも、無制限に善と見なされ得るものは、善意志のほかにはまったく考えることができない。」<sup>(36)</sup>と、カントは、世界の内外に於いて、無制限に善と見なされるものは、善意志以外考えられない。すなわち、善意志 (guter Wille) だけであると考慮している。続けて、カントは、

「知力、才気、判断力等ばかりでなく一般に精神的才能と呼ばれるようなもの、—或いはまた気質の特性としての勇氣、果斷、目的の遂行における堅忍不拔等が、いろいろな点で善いものであり、望ましいものであることは疑いない、そこでこれらのものは、自然の賜物と呼ばれるのである。しかしこれを使用するのは、ほかならぬ我々の意志である、意志の特性は性格であると言われるのは、この故である。それだからこの意志が善でないと、上記の精神的才能にせよ、或いは気質的特性にせよ、極めて悪性で有害なものになり兼ねないのである。」<sup>(37)</sup>、と述べている。つまり、カントは、自然の賜物 (善いもの、望ましいもの) である、①精神的才能 (知力、才気、判断力等) や②気質的特性 (勇氣、果斷、目的の遂行における堅忍

---

(36) Immanuel Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1963, S.10.この書で、カントは、“ein guter Wille”を使用している。また、カント『道徳形而上学原論』(篠田英雄訳)、岩波書店、22ページ。



不拔等), これらを使用するのは, 我々の意志であるが, 善意志でないと悪性で有害なものになり兼ねないと言う。次に, 幸福について,

「およそ幸福という名のもとに総括されるところのものは, 人をして得意ならしめるが, しかしこれらの幸福の賜物が人間の心情に及ぼす影響を規正するばかりでなく, またそうすることによって行為の原理全体までも規正して, これを一般的—合目的たらしめるような善意志がないと, 彼をしばしば傲慢にするのである。物の分かった偏見のない人でも, 純粹で善良な意志のひとかけらも身の飾りにしていないような人物が, 健康と繁栄とを享受し続けている有様を眺めては, さすがに好感をもち得ないことは言うまでもあるまい。それだから善意志は, 人間が幸福に値いするためにも, 欠くことのできない条件をなすもののように思われる。」<sup>(38)</sup>。

**幸福=幸運の賜物** (権力, 富, 名誉, 健康, 身の上の安泰, 満足感) である。善意志は, 人間が幸福に値するためにも必須な必要条件とカントでは思惟されている。さらに, カントは, 善意志 (guter Wille) について, 次の如く記述している。

「善意志は, それが遂行し或いは成就するところのものによって善なのではない, また何によらず所期の目的を達成するに役立つから善なのではない。善意志は, 実に意欲そのものによってのみ—還元すれば, それ自体として善なのである。」<sup>(39)</sup>。

ゆえに, ドイツ観念論—カントの善意志 (guter Wille) について—では, 目的達成に役立つから善なのではなく, その善意志自体が善であるとした。しかし, 善意志自体やその動機だけでなく, その事柄や行為の結果も善であることがより一層価値があると, 論者は考えるのである。

## 第9節 キリスト教 (Christianity) —愛 (agapê) について—

キリスト教は, 三元徳=信仰, 希望, 愛であるが, その愛 (アガペー = agapê;

(37) 注(36)参照。Immanuel Kant, *ibid.*, S.10.また, カント, 前掲書, 22ページ。

(38) 注(36)参照。Immanuel Kant, *ibid.*, S.10.また, カント, 前掲書, 22-23 ページ。

(39) 注(36)参照。Immanuel Kant, *ibid.*, S.11.また, カント, 前掲書, 24ページ。

また, 注(21)参照。拙著, 前掲書 (『教育哲学要論』), 157ページ。

さらに, 拙稿「カント著『道徳形而上学原論』—序言の意図と趣旨について—」, 『学と文芸』72集, 学と文芸会, 平成9年4月30日, 17ページ, 等。

love) の宗教といわれる。

『聖書』 (*the Bible*) は、神と人間との歴史における出会いの物語である<sup>(40)</sup>。

(1) 『旧約聖書』 (*the Old Testament*) …アブラハムの子孫であるイスラエル民族と神との関係を述べている。神は、この民をエジプトでの奴隷状態から開放し、モーセとシナイ山で契約を結び、約束の地カナンを与え、さらにその後の歴史の歩みによって自らを知らせる。この古い契約を中心として書かれた諸章 (創世記～マラキ書まで39, 続編トビト記～マナセの祈りまで15=Total・54) を「旧約聖書」と呼ぶ。

①初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面 (おもて) にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」。こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。(創世記1-1～5)<sup>(41)</sup>。[天地の創造]。

②また、すべて命あるもの、すべて肉なるものから、二つずつ方舟 (はこぶね) に連れて入 (はい) り、あなたと共に生き延びるようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならない。それぞれの鳥、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものが、二つずつあなたのところへ来て、生き延びるようにしなさい (創世記6-19～20)<sup>(42)</sup>。[ノアの方舟]。

③わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。(列王記上17-1)<sup>(43)</sup>。[預言者エリヤ、干ばつを予言する]。…聖書の全内容を表現している。

(2) 『新約聖書』 (*the New Testament* (1)) …イエス・キリスト (Jesus Christ, 4B. C.-A. D.29) による新しい契約を中心として書かれた諸章 (マタイによる福音書～ヨハネの黙示録まで27) を「新約聖書」と呼ぶのである。

①敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい (マタイ5-44)<sup>(44)</sup>。[敵を愛せ

(40) 新共同訳『聖書』, 財団法人日本聖書協会, 1987, 聖書について, (1) ページ。

(41) 注(40)参照。新共同訳, 前掲書, [創世記1-1～5], (旧) 1ページ。

(42) 注(40)参照。新共同訳, 前掲書, [創世記6-19～20], (旧) 10ページ。

(43) 注(40)参照。新共同訳, 前掲書, [列王記上17-1], (旧) 648ページ。

(44) 注(40)参照。新共同訳, 前掲書, [マタイ5-44], (新) 10ページ。

よ]。

②求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。(マタイ7-7)<sup>(45)</sup>。[求めよ]。

③人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。(マタイ7-12)<sup>(46)</sup>。[先に人にせよ]。…キリスト教の黄金律である。儒教の祖・孔子は「己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ。」(『論語』顔淵第12, 衛霊公第15)<sup>(47)</sup>、と述べている。

④主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。(ヨハネの黙示録22-21)<sup>(48)</sup>。  
[キリストの再臨], …「新約聖書」のラスト。[アーメン (amen)]<sup>(49)</sup>。

ゆえに、キリスト教 (Christianity) —愛 (agapê) について—では、倫理的観点からいえば、釈迦 (仏陀=Buddha) の説く、人間の苦悩の解決の道を教える仏教 (Buddhism)<sup>(50)</sup> はあわれみ、慈悲の宗教に対して、イエス・キリストの人格と教訓とを中心とするキリスト教は、三元徳=信仰, 希望, 愛であるが、愛 (アガペー=agapê; love) の宗教 (religion)<sup>(51)</sup> であるゆえ、人々にこの神 (God) の恩寵による「愛」が重要と、論者は思考するのである。

次に、Ⅲ 結論 (倫理学とは何か [1] —西洋倫理学と関連して—) を記述する。

### Ⅲ 結 論 (倫理学とは何か [1] —西洋倫理学と関連して—)

(1) 倫理学とは何か—人間の行為の原理を研究する学—では、倫理学の概念は多

(45) 注(40)参照。新共同訳, 前掲書, [マタイ7-7], (新) 13ページ。

(46) 注(40)参照。新共同訳, 前掲書, [マタイ7-12], (新) 13ページ。

(47) 仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。(『論語』顔淵12), (傍点筆者)。また、  
子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。(『論語』衛霊公15), (傍点筆者)。

(48) 新共同訳, 前掲書, [ヨハネの黙示録22-21], (新) 557ページ。

(49) アーメン(amen)とは、元来、ヘブライ語で、まことに、たしかに、かくあれ、などの意味である。キリスト教の祈祷、讚美歌、信条などの終りに唱える言葉である。

(50) 拙著, 前掲書 (『哲学要論』), 第4章キリスト教, 51ページ。

(51) 拙著, 前掲書 (『教育哲学要論』), 13. キリスト教と仏教, 163ページ, 等。

様であるが、倫理学の定義は「人間の行為の原理を研究する学」と、論者は思考するのである。そして、この行為 (Conduct) は、能動的で活動的な行為としてのアクション (Action) であり、手が必要なため身体的運動としてのハンドリング (Handlung), これらを止揚して (aufheben), 総合された身体的, 精神的な行為に分類できると言えよう。

(2) **なぜ倫理学が必要か**—人倫と理法の学における価値—では、主に、(1)人間, (2)人倫, (3)理法, (4)幸福, (5)行為, これら5つの必要性と価値がある。

(3) **ソクラテスの「汝自身を知れ」(gnôthi seauton.)**—西洋倫理学の創始—では、自然哲学者達の自然のアルケー (archê) や、ソフィスト達の人間の問題に対して、愛知者・ソクラテスは、人間の原理, 人間の本質的なものを問題にしたと言えよう。いわば、「汝自身を知れ」, 「無知の知」, 「産婆術」, 「善く生きる」, 「知徳福の一致」や「知行合一」などの事柄において、ソクラテスが、西洋倫理学の創始であり、創始者であると、論者は考えるのである。

(4) **プラトンの哲人政治と善のイデア**—四元徳とイデア論—では、プラトンは、哲人, すなわち、哲学者が、善のイデアを認識して、「哲学者が、政治家となるか, さもなければ、政治家が哲学すべきである」と主張した。それが、善き国家であり、人々の理想的な美にして善の倫理的なあり方である。

(5) **アリストテレスの倫理学(実践哲学)**—観照 (theôria) と中庸 (mesotês)—では、その人の目的が善であり、究極的な目的が最高善である。最高善は幸福である。人間は理性がある。理性には知的徳のテオーリア (観照) と道徳的のメソテース (中庸) が関係している。それらは善であり、幸福が配慮されていると、論者は考えるのである。

(6) **イギリス経験論**—経験 (Experience) について—では、ベーコン, ホッブズ, ロック, バークリー, ヒュームの5人のイギリス経験論者達は、「経験」(Experience) を重視した。倫理学上、経験は重要な事柄である。しかし、経験といっても、これらイギリス経験論者達各自の経験の概念や内容は多様で必ずしも同一でないと、論者は思考するのである。

(7) **大陸合理論**—理性 (ratiô) について—では、デカルト, パスカル, スピノザ, ライプニッツなどのヨーロッパ大陸合理論達は、「理性」(ratiô) を重視し価

値を置いた。

(8) ドイツ観念論—カントの善意志 (guter Wille) について—では、目的達成に役立つから善なのではなく、善意志自体が善であるとした。しかし、善意志自体やその動機だけでなく、その事柄や行為の結果も善であることが一層価値があると、論者は考えるのである。

(9) キリスト教 (Christianity) —愛 (agapê) について—では、倫理的には、仏教はあわれみ、慈悲の宗教に対して、キリスト教は、三元徳=信仰、希望、愛であるが、愛 (agapê; love) の宗教であるゆえ、人々にこの神 (God) の恩寵による「愛」が重要であると、論者は思考するのである。

さらに、この論文、「倫理学とは何か [1]」では、それらを分析や総合し、一応全体的に体系化を試みたのである。

よって、このような内容により、論者の「倫理学とは何か [1] —西洋倫理学と関連して—」(What is Ethics? [1] —In Reference to Western Ethics—) の論文は、過去だけでなく、現在はもとより、未来に向かっても、多少なりとも意義と価値があるろうか、と論者は考えるのである。

…………… {平成14 (2002) 年} 10月17日 (木曜日), 原稿提出} ……………